報　　告

情動的コミュニケーションを基盤にした働きかけと現象学的分析
―自閉症児の志向性から作業療法の成果を問う―

辛　島　千恵子

〔論文要旨〕

本事例研究の目的は，自閉症児（以下，児）と作業療法士（以下，OT）の情動的コミュニケーションを基盤とする作業療法の成果を児の志向性から探索することである。方法は，ビデオ撮影された2セッションの作業療法場面の事実から現象学的分析に基づいて，児とOTの関係性に着目して児の志向性をOTが意味づけた。結果，情動的コミュニケーションを基盤とした共感関係が築かれていくなかでOTへの関心が高まり，活動と身体を介したコミュニケーションから道具を用いた活動を介したコミュニケーションへと関係性が発展した。そのプロセスで，ことばでの簡単な交信が増え，児の志向性が明確な意図としてOTに感じ取ることができる関係性がつくられた。

Key words：自閉症，作業療法，情動的コミュニケーション，現象学的分析，質的研究

Ⅰ．はじめに

作業療法は，子どもにとって意味のある活動が遂行できるように子どもと環境，その交互作用を評価する。そして，目的を明確に定め，それらを達成するために手段・方法を駆使して働きかけを行いその結果，活動の遂行と快情動，満足感，達成感や自尊感情を誘う療法である。

自閉症または自閉症障害とは，①対人的相互反応における質的な障害，②コミュニケーションの質的な障害，③行動，興味，および活動が限局され，反復的で常同的な様式をもつと定義づけられている[1]。小林は，自閉症のコミュニケーションの質的な障害を，ことばや身振りによる象徴的コミュニケーションが生まれる前の段階の情動的コミュニケーションに焦点をあてて，2者関係性障害という観点から関係障害としてとらえている[2,3]。

近年，作業療法の対象に自閉症児も増え，感覚統合療法を主な介入理論として，その成果を示している[4~6]。これは，大脳皮質の機能（抽象，知覚，推理，言語および学習）の最適な発現を担っている大脳皮質下の機能に着目して，その機能の改善，調整を図ることを目的としたものである[7]。このようなボトムアップの作業療法の効果を得る反面，日常生活での対人関係や象徴的（symbolic）コミュニケーションが問題となる児に対して，生活場面における2者関係性のなかでの情動的コミュニケーション[2,8]の成立を意図し，活動の遂行を図るトップダウンの作業療法[9]も重要と考える。著者らは，最重度コミュニケーション障害者の表情から，そ

The Phenomenological Analysis and Approach Based upon Affective Communication
― The Effects of Occupational Therapy from the View Point of the Intentionality of a Child with Autism ―
〔2113〕
受付 09. 2. 6
採用 09. 8.24

Chieko KARASHIMA
名古屋大学医学部保健学科作業療法学専攻（研究職/作業療法士）
別刷請求先：辛島千恵子　名古屋大学医学部保健学科作業療法学専攻
〒461-8673 愛知県名古屋市東区大幸南1-1-20
Tel/Fax：052-719-1372

Presented by Medical*Online

の情動を正しく判断できるのは，対象者のケアを担当し，常に2者関係で接している施設職員であるということを検証した[10]。また，同時に2者関係の作業療法を実施するなかで自発性が増すと同時に，嬉しさの情動を表す「幸福の表情」が増すことをシングルデザイン実験法にて検証した。「幸福の表情」とは，Matsumoto と Ekman[11]によって表情の妥当性が証明されている表情刺激画像をもとに，辛島らが最重度コミュニケーション障害者の嬉しいという情動を表す表情の妥当性を検証したものである[10]。これらの報告を重ねて，作業療法の成果を実験的研究で示してきた[12,13]。しかし，2者関係での情動的コミュニケーションの成立過程と自発的行為の現れとの関係性については不明であり，課題として残された。

情動的コミュニケーションとは，主として対面する2者関係において，その心理的距離が近いときに，一方または，双方の気持ちや情動の繋がりと共有を目指しつつ，関係を取り結ぼうとするさまざまな営みをいう[2]。養育者と子どもの関係だけではなく，特定の2者関係において，気持ちや情動などの共有が目指されているものをいう。また，意識の志向性とは，このような関係性のなかで，話ことばや身振り言語として表現できない児の意図をいう[14,15]。一般的には，2者関係での情動的コミュニケーションを基盤にして生活が広がり，不特定多数の人との関係へと発展した時に，伝え手と受け手の心理的距離が成立する。それによって，情報を正確に授受する関係性が必要になってきた時に，話ことばや身振り言語などの象徴機能を媒体とする象徴的（symbolic）コミュニケーションの発達の必要性が前面に浮き上がってくるのだと考える。

小林は，象徴的コミュニケーションと情動的コミュニケーションの関係は，①情動的コミュニケーションこそ，コミュニケーションの本態である。②象徴的コミュニケーションは，そのうえに積み重なる。③その時，情動的コミュニケーションは，その根底に生き続けるものである[2]，と述べている。

次に，現象学的分析とは，専門的知識や常識から離れて，児のことばや行為そのものに立ち帰り（現象学的還元），それを丁寧に記述して（現象学的記述），得られたデータに即して，生きた体験を読み取ること（現象学的分析）をいう[16]。

発達障害の作業療法は子どもと作業療法士の2者関係が基盤でありながら，関係性に着眼して作業療法の成果を述べた報告はない。そのため，本報告にて，2者関係性における情動的コミュニケーションの成立過程と自発的行為の現れに着眼して，新たな視点で自閉症児の作業療法の成果を問うことは意義があると考える。

Ⅱ．研究の目的

本事例研究の目的は，情動的コミュニケーションを基盤にした作業療法の場面から，自閉症児の行為を現象学的分析に基づいて意味づけるなかで自閉症児の意識の志向性を考察し，作業療法の成果を探索することにあった。

Ⅲ．方　　法

1．対　象

対象は，知的障害をともなう自閉症の6歳男児（以下，児）で，父と母，妹（双子で自閉症）の4人暮らしであった。生育歴は，帝王切開（36週，6日）にて出産し，出生体重は2,066 g（保育器4日）。首のすわり，4か月。這い這い，10か月。あやすと笑うとひとり歩き，12か月。人見知りはなかった。3か月と6か月健康診査にて運動発達が要観察，続いて1歳6か月にことばの遅れについても要観察となった。2歳6か月の時に知的障害をともなう自閉症と診断を受けて，A発達支援センターにて通園開始となった。6歳時点では，B保育園5,6歳クラスに在籍して，週に1回だけA発達支援センターの個別療育を受けていた。

2．作業療法

1）情報収集

表1の「児の個別療育の経過と課題」を保育士から聞き取った。また，感覚発達チェックリスト改訂版[17]（Japan sensory Inventory Revised 以下，JSI-R）の結果は，前庭感覚，触感覚，固有受容感覚，聴覚，視覚が Red（感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される）の判定，

Presented by Medical*Online

表1　児の個別療育の経過と課題

1．遊びの広がりを楽しめること，人との関係が深まっていくことを目標として，取り組んできた。

2．スクーターボード等の感覚刺激を楽しみ，おんぶなどの前庭，触覚刺激も好きになり，好きなことが増えた。大人との関わりを持ちたいという気持ちが広がってきた。

3．その反面，**どのようにコミュニケーションをとってよいかわからず，物を投げ，本を破く，つばを吐くなどの関わりが見られる。しかし，大人が怒る，ダメと手で×印をつくると止めることもある。**

4．3のような行動も，本児が大人に関わりたいという気持ちの現れと思い，保育士は関わっているが，**本児との遊びに発展がみられない。**

5．本人の意向と異なる課題は，強制しない，新しい課題に変えるなどをして対応しているが，**児のよくない行動は改善されない。**

6．ボールプールに入ること，ボールを投げ散らかして遊ぶ，大人と一緒にボールプールに入ること，トランポリンを大人と一緒なら，跳ぶこと・スイングに乗ることは楽しく行う。その時は，つばを吐くことが少ない。しかし，ボールを目的をもって投げることやトランポリンで跳んだ後に，止まることができない。ブランコは乗ろうとしない。

――：センソリーニーズの現れ　　**太字**：今後の課題　　1，2は経過

嗅覚はGreen（典型的な状態），味覚はYellow（若干，感覚刺激の受け取り方に偏りの傾向が推測される）であった。

2）情報の解釈

JSI-Rの結果と表1の「児の個別療育の経過と課題」のアンダーラインは触感覚，前庭感覚のセンソリーニーズ[18]の現れで，充足させてあげることで，人や人が行っていることへ関心（注意）が向けられると考えた。また，コミュニケーション面では，大人から期待されていることを理解しつつあるからこそ，わからない時，できない時のもどかしい思いが「つばを吐く，物を投げる，壊す」という行為で表されているのではないかと推測した。また，大人の表情を読む，ダメのサインがわかることから，象徴機能の理解は，一部可能であると判断した。

3）作業療法の目標

2セッションの作業療法を実施（評価と働きかけ）した後に，児との関係のとり方，遊びの発展のさせ方などを個別療育に提案する。

4）作業療法の目的

i．児のセンソリー（前庭感覚，触感覚）ニーズを満たすなかで，OTへ注意，関心を高める。

ii．iの展開のなかで，姿勢保持，運動企画，目と手の協調遊びを自ら楽しむことができる。

iii．i～iiを十分に反復した後に，道具の活動を一緒に行う，見て真似る，関心を寄せて自ら行う，という段階まで誘導する。

5）作業療法の手段，方法

i．情動的コミュニケーションの成立を目指した働きかけ

a 成り込み[19]

児が関心を示した遊びを「作業療法士がともに感じたい」という思いで同じ遊びを展開し，共有すること。

b 巻き込みに伴う先取り成り込み[19]

作業療法士の意図する遊びに誘いたい時に，まずは，児の遊びを共有する。そのなかで，作業療法士が意図する遊びを先に行いながら，児を誘うこと。

c 巻き込み[19]

作業療法士の意図する遊びに児を誘う。具体的には，手をつなぎ連れて行くことやモデリング[20]，身体促進[21,22]を行いながら誘うこと。

d 見守り

児の様子を静観すること。

e モデリング[20]

作業療法士が遊んで見せる，道具などを使って見せることによって，児の行為に変化が生じること。

f 身体促進[21,22]

身体に触れてやり方を教えること。

aからcは，鯨岡の関係発達論[3,19]に基づいた働きかけである。関わるものが，どんな思いで関わるかということに視点をおいた。

ii．感覚統合理論[7]に基づき，行為の基盤となるセンソリーニーズの調整と姿勢や運動企画を遊具にて促す。

Presented by Medical*Online

iii．活動と設定

感覚統合遊具（前庭刺激，触覚刺激，固有感覚刺激などを楽しむための遊具）のあるプレイルームを使用。活動は，ボールプール（以下，プール）。プールの中に小さなボールが入っている），ポニースイング（以下，スイング・2人乗り用の大きな板状のブランコ），トランポリン，大きなローラー(以下，ローラー)，体育用のマット（以下，マット），コロコロスロープ（以下，コロコロ。傾斜した板の上に玉を転がして遊ぶ），はさみと紙，コマ，ボール。ビデオカメラ（以下カメラ）。

iv．作業療法の実施

2008年9月9日（第1セッション），9月10日（第2セッション），午後1時から2時。

3．結果の分析方法

現象学的分析方法[23~26]を参考にして行った。情動的コミュニケーションをベースにして，ある気持ちが共有されている状態（共感）のなかで，作業療法士や作業療法がどのような存在として意味をもって児の行為に映しだされるかを相互関係から意味づけた。意味づけは，2者関係をとっている作業療法士（以下OT，研究実施者を示す）が行った。

1）2セッション それぞれの作業療法（30分）の録画の再生

経時的に活動ごとに区分し，1区分を5回再生した。

2）区分ごとの事実（以下，分析上の単位としてファクト）を表に記載

OTと児の行為に分け，OTの行為は，1区分の活動の提示と働きかけを1つのまとまりとして記述した。それらに対する児の行為を1つのまとまりとして丁寧に記述した。

1）と2）は，児と関わったOTが分析を行った後に，研究に関与しない作業療法士が，再度行った。一致しない区分とファクトの記載は協議して決めた。

3）ファクトの意味づけ

i．1区分のOTと子どもの行為の記述に即して意味づけた。OTの働きかけが，どのような意味をもって児の行為に映しだされたか，また，児の行為からOTが，どのような働きかけを行ったかを意味づけた。それらの中心的意味を取り出してタイトルをつけた。

ii．OTと児の相互の関係性について，さらに意味づけを行いタイトルをつけた。そして，各区分を表に時系列的に並べて，児へのOTの働きかけが児にとってある意味として伝わり，それに対して児のなんらかの身体的表示が現れた箇所を一区切りとして大タイトルをつけた。

4．インフォームドコンセントと倫理的配慮

A発達支援センター長へ依頼をしたうえで，研究内容の説明を文書と口頭にて行い，承諾を得た。児の保護者には，研究の説明と参加への危険，利益，不利益やそれに伴う倫理的配慮を説明書にそって，口頭で説明を行ったうえで同意書にて署名をいただくことをもって同意を得た。個人情報の保護については，データ解析までの資料は，A大学研究室にて鍵のかかるロッカーに保存し研究終了時にはすべての資料を破棄し，個人情報の保護に努めた。

Ⅳ．結　　果

第1セッションは，30区分で活動の内訳は，プール8，マット4，スイング5，トランポリン4，ローラー2，コロコロ2，ボール2，カメラ2，ボールのお片づけ1であった。第2セッションは28区分で活動の内訳は，プール4，スイング2，プールとボール5，スイングとトランポリン2，抱っこ1，ローラー2，コロコロ2，ボール1，準備を見ている1，はさみ1，はさみと紙2，はさみとコマ2，コマ2，ボールのお片づけ1であった。表2，3に第1と第2セッションの結果を示す。大タイトルごとに相互関係の意味づけ（要約）と区分と大タイトルが導かれるまでのOTと児のファクトとタイトル数を示す。

Ⅴ．児の意識の志向性についての考察と作業療法の成果

考察は，結果に示した相互関係の意味づけ(要約）にそって（表2，3），児の意識の志向性について行う（図1，2）。

Presented by Medical*Online

表2　第1セッションの結果

大タイトル	相互関係の意味づけ（要約）	OT		児	
		ファクト	タイトル	ファクト	タイトル
①センソリーニーズの充足・OTの成り込み・相互の関心　（区分1～4）	児はOTから与えられる感覚刺激に満足し，OTに関心を寄せる。	12	8	14	8
②センソリーニーズの充足・声かけに身体で共応する　（区分5～7）	OTの「いち，にい，さん」に応えてプールに飛び込む。遊びの共有を求めている。	8	5	7	4
③関係の休息　（区分8）	OTと関わるのが嫌になったため，カメラをのぞき込む。	8	5	7	4
④センソリーニーズの充足・OTへの関心・モデリング　（区分9）	OTがコロコロをして見せる，児は関心を寄せて見ている。	5	1	1	3
⑤新しい遊具への巻き込みに伴う先取り成り込み・児の関心の高まり　（区分10～14）	OTが抱擁するとつばを吐くが，OTと遊びを共有したことから，OTを拒否する行為ではない。	13	5	10	5
⑥センソリーニーズの充足・関係の休息　（区分15）	OTと関わった後は，プールのなかで強い刺激を求めている。	1	1	2	1
⑦OTの巻き込み・目と手の協調・センソリーニーズの充足　（区分16～19）	抱っこをしてトランポリンに誘う。つば吐きはなく，OTを受け入れる。児はコロコロを1度行う。OTを見て，まるで「やってあげたよ」と言わんばかりの表情をした。OTの期待を読み取ったかのようである。次にプールに飛び込む。	7	4	8	4
⑧巻き込みに伴う先取り成り込みの成功　（区分20～22）	OTがプールで遊んだ後，ローラーに乗って楽しんでいるの見て，自らローラーに乗る。	3	3	4	3
⑨巻き込みの成功　（区分23）	抱っこして一緒にスイングに乗る。児が拒否するのではないかと不安があったが，一緒に揺れを楽しむことができる。	1	1	2	1
⑩センソリーニーズの充足と休息　（区分24）	児はOTから離れて，自らトランポリンに乗り強くジャンプする。	1	1	2	1
⑪目と手の協調遊びへの関心・モデリング　（区分25）	OTがコロコロを遊んでみせる，児は関心を寄せて見ている。	1	1	3	2
⑫カメラと休息　（区分26）	カメラをのぞき込むことで，関係を休息する。OTとの関係を継続しようとしている。	1	1	3	1
⑬巻き込みの成功・スイングを何度も楽しむ　（区分27）	OTの誘いに応じて，自らスイングに乗って揺れを楽しむ。	1	1	1	1
⑭新しい遊びへの巻き込みに伴う先取り成り込み・児の応答　（区分28）	スイングで共に揺れながら，OTの期待に応えて輪を身体に入れる遊びを楽しむ。	1	1	2	1
⑮他動的な強い感覚遊びに応じる　（区分29）	児自ら，ロープを握り姿勢を保持する。OTが抱擁すると身を委ねてきた。	1	1	1	1
⑯お片付けの共有　（区分30）	早く終了したいかのように手早く片付けを手伝う。	1	1	1	1

注：表は時系列順に記載・ファクト＝事実
1．成り込み：児が関心を寄せた遊びを「OTがともに感じたい」という思いで，同じ遊びを展開し，共有すること。
2．巻き込みに伴う先取り成り込み：OTの意図する遊びに誘いたい時に，まずは，児の遊びを共有する。そのなかで，OTが意図する遊びを先に行いながら，児を誘うこと。
3．巻き込み：OTの意図する遊びに児を誘うこと。

1．第1セッションの考察

児は，OTから与えられる感覚に満足した。OTが自身の遊びに関心を寄せている大人であり，さらにその姿に自身が楽しんでいるということが映し出された（**表2－①②**，**図1－①**）。児はOTの声かけに対して身体で共応して，ともに遊びを共有した。児が関心を寄せた，マットやプールでの遊びをともに楽しみたいという思いで，遊びを共有するといったOTの成り込み（**図1－①**）により，遊びが展開された。その後は，自分ひとりで楽しめるカメラをのぞきにいく（**表2－③**），プールやトランポリンで

Presented by Medical*Online

表3 第2セッションの結果

大タイトル	相互関係の意味づけ（要約）	OT		児	
		ファクト	タイトル	ファクト	タイトル
①自発的な遊びの展開・相互の巻き込み（区分1～6）	プール，スイングでのボールのやり取りを楽しむ。トランポリンを声を出しながら楽しむ。	8	6	19	12
②机上活動の準備・OTへの関心（区分7）	OTが机，コマ，はさみ，紙などを準備する様子をじっと見ている。	1	1	2	1
③センソリーニーズの充足・ことばと身体での相互の巻き込み（区分8，9）	身体全身を使った遊びとOTの声かけに呼応するように，ボールのやり取りを楽しみ，正確にボールをOTに投げる。	3	2	8	4
④目と手の遊び・関心を示さない（区分10）	OTが，コロコロをして見せても，関心を示さない。	1	1	1	1
⑤センソリーニーズの充足・OTの巻き込み・OTへの関心の高まり（区分11，12）	プールの中で楽しみながら，OTからのボールを期待している。声かけに対して，プールから顔を出す。	4	4	7	3
⑥自発的な目と手の協調遊び（区分13）	OTをプールに残したまま，自らコロコロに行き，何度も反復して楽しむ。	1	1	2	1
⑦OTの巻き込み・姿勢保持と失敗（区分14）	スイングに自ら乗って楽しむ。OTの立位での遊びを促す強い巻き込みに応じる。ロープを保持しながら，自らもバランスを保とうとする。	2	2	3	3
⑧センソリーニーズの充足・ことばを真似る（区分15）	OTの「いち，にい，さん」の声かけに対して，自らも「いち，にい，さん」と言ってプールに飛び込む。	1	1	5	2
⑨センソリーニーズの充足・はさみの活動に関心を示さない（区分16）	児がプールで遊んでいる時に，OTがはさみを使って見せるが，自分に関心を向けさせようとプールに飛び込む。	1	1	4	2
⑩ことばを仲立ちにしたボールのやり取り（区分17）	「はーい，いくよ」というOTのことばを児が真似ながら。ボールをやり取りする。	3	2	4	3
⑪ローラー遊びとOTの巻き込み（区分18）	バランスや運動企画を要する遊びにOTが巻き込み，それに応じる。	2	2	4	1
⑫机上活動への巻き込み・ことばでの拒否とOTへの信頼（区分19～21）	OTが「チョッキン」と促しながら誘う。「ダメ」と言って，OTの手を握りにやってくる。	6	3	4	3
⑬再び机上活動への巻き込み・強い拒否（区分22）	OTが再び，はさみ活動に巻き込むが，強く「ダメ」と拒否する。	2	1	1	1
⑭ローラーでの反復遊び（区分23）	自ら，さまざまな方法で遊ぶ。OTの働きかけを楽しむ。	2	1	1	1
⑮机上活動への巻き込みに応じる・成功感と活動の持続・モデリング（区分24～27）	抱っこをして，机の前まで誘う。つば吐きがあるかと思ったが応じる。身体誘導にて，はさみの使い方を教える。励ましに対して，何度も紙を切ることができる。	6	6	8	6
⑯お片付けの共有（区分28）	早く終了したいかのように手早く片付けを手伝う。	1	1	2	1

注：表は時系列順に記載・ファクト＝事実
1．成り込み：児が関心を寄せた遊びを「OTがともに感じたい」という思いで，同じ遊びを展開し，共有すること。
2．巻き込みに伴う先取り成り込み：OTの意図する遊びに誘いたい時に，まずは，児の遊びを共有する。そのなかで，OTが意図する遊びを先に行いながら，児を誘うこと。
3．巻き込み：OTの意図する遊びに児を誘うこと。

強い感覚刺激を求める（表2－④，図1－②）ことで自身の準備を整えて，OTとの関係性を保とうとした。児なりのOTとの距離や関わり方，感覚調整と遊びのパターンがあると考える。OTは児の遊びに成り込み，児の求める遊びを通じて共感関係を作り上げた（図1，点線囲い箇所）。感覚調整，姿勢反応の促通，運動企画を促す目的で遊具を調整する場合は，OTの意

Presented by Medical*Online

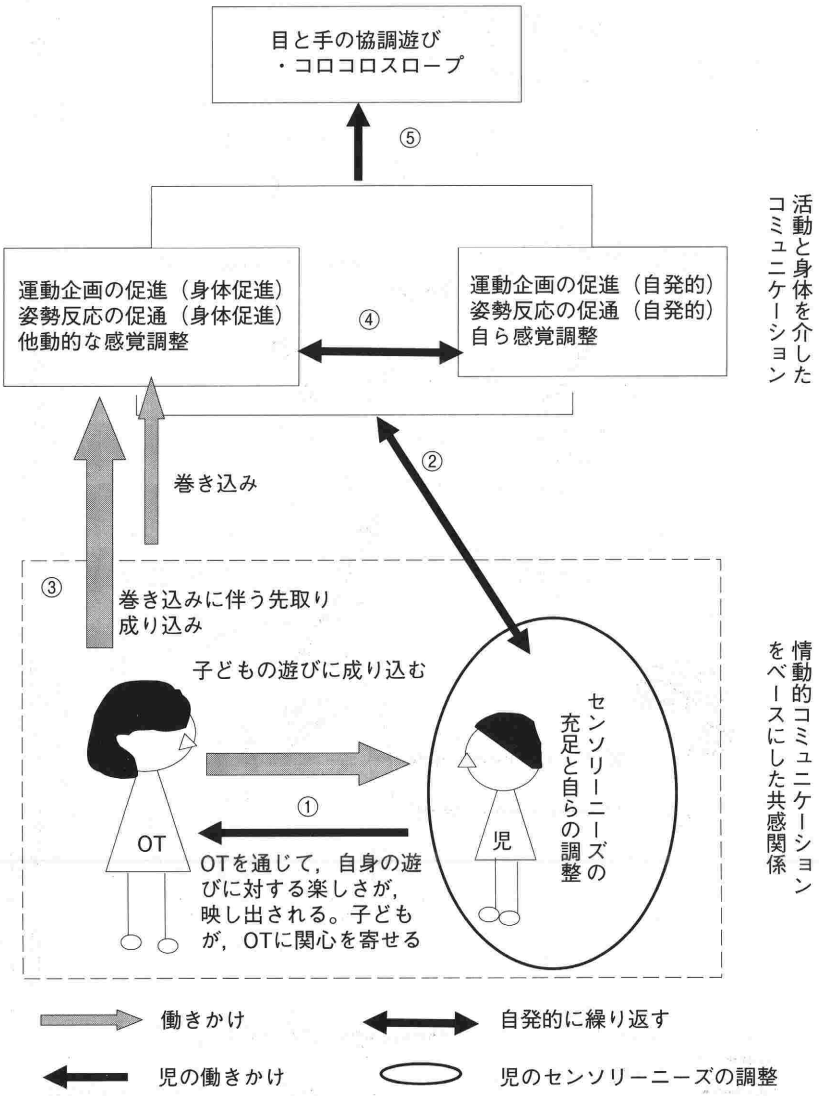

図1　第1セッションの考察

図する方向に誘いこもうとするのではなく（巻き込み），OTが児の遊びを共有してから，ローラーを楽しむのを示して誘った（巻き込みに伴う先取り成り込み，図1－③）。その働きかけが，自発的にローラーで楽しむという行為に繋がった（表2－⑧，図1－④）と考える。また，コロコロを示すと（表2－④），遠くにいてもOTの声と遊びに関心を寄せてじっと見ていた。その後，自らコロコロに1回だけ玉を入れた（図1－⑤，表2－⑦）。プールやスイングとは異なり，成り込みを行わずにモデリングのみでは，その遊びの楽しさをOTと共有することができず，継続して楽しむには至らない。また同時に，大人の遊びに関心を寄せるためには，児の準備として，先にセンソリーニーズが満たされていることが大切であることが，表2－④⑥⑦⑩の後にOTへの関心や遊具への自発的行為が現れていることからわかる（図1－②）。

Ayersは，感覚刺激に対して，過剰反応，過少反応，もしくは変動する反応を示す状態を感覚調整障害としている。それらのセンソリーニーズを満たすことが，日常の生活での情動的な落ち着きや課題，関わる人への関心が保たれると述べている[26]。児の場合も，前庭感覚，触

Presented by Medical*Online

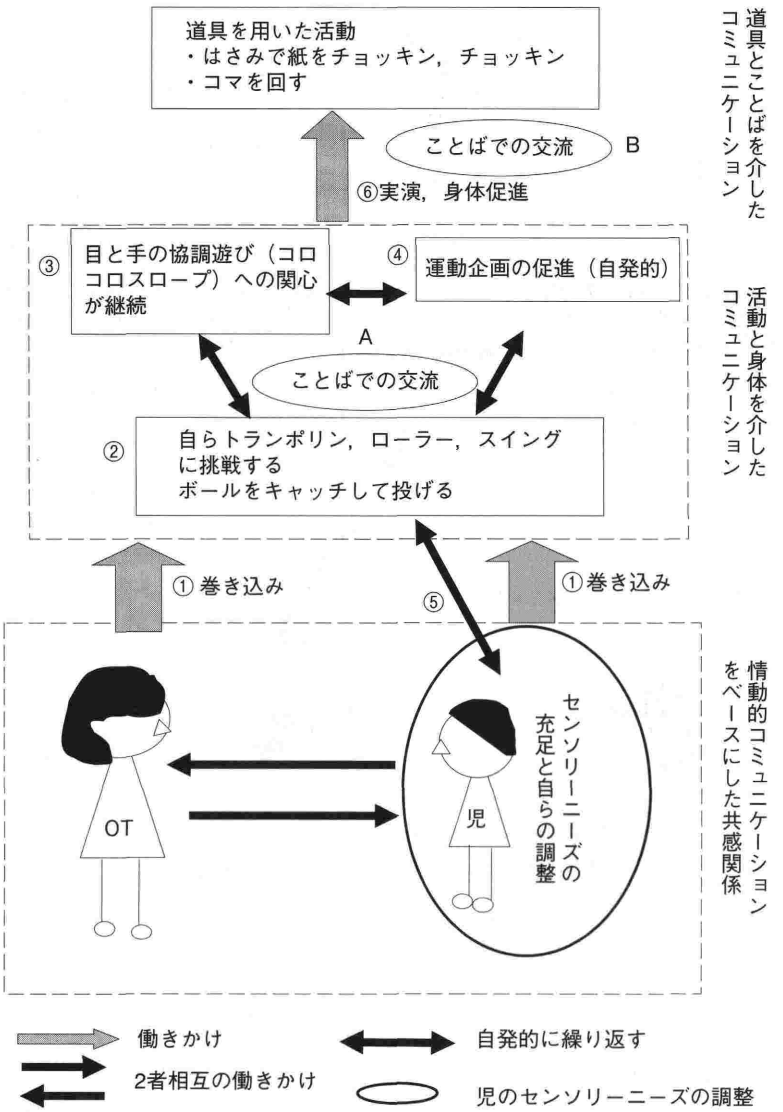

図2　第2セッションの考察

感覚を自ら求めるが，人から積極的に動かされること，触れられることは苦手である。これは，前庭感覚，触感覚に対する反応が過剰であり，変動することを意味している。そのため，感覚統合理論に基づいてセンソリーニーズを充足させるという働きかけが，OTへの関心を高めることに繋がったと考える。また，OTが抱擁した時につばを吐くという行為（表2-⑤）については，その後，スイングに抱っこをして連れて行った時に，みられなかったことから（表2-⑨），抱擁するという他者から与えられる触感覚への拒否的な応えであり，関わりをもつOTへの拒否ではないと考える。児なりの他動的な触感覚への防衛的な対応と判断できる。

2．第1セッションにおける作業療法の成果

OTが児の遊びを共有する（成り込み）という働きかけにより情動的コミュニケーションの基礎づくりが行われるなかで，OTへの関心を高めながら共感関係を成立させた（図1，点線囲い箇所）。また，児のセンソリーニーズを満たしながら，共有（成り込み）をベースにして，

Presented by Medical*Online

OTが意図する姿勢反応や運動企画を必要とする遊びを楽しむ（巻き込みに伴う先取り成り込み）ことができた（表2－⑧⑬～⑮）。共有（成り込み）という情動的コミュニケーションをベースとした相互関係のなかで，活動と身体を介したコミュニケーションが成立した（図1－④）。さらに，わずかながらではあるが，目と手の協調遊びを行うことができた（図1－⑤）。

3．第2セッションの考察

第2セッションは，第1セッションで経験した遊具に，自らが挑戦するなかで，児からの「一緒に遊ぼう」と誘うような巻き込みが展開された（表3－①，図2－①）。OTのファクト数8に対して，児のファクト数が19と多いことから，多くの活動を自発的に展開したことがわかる。児は，さまざまな感覚統合遊具でセンソリーニーズを満たす遊びに集中した（表3－③⑤）。第1セッションで築かれたOTとの共感関係を基盤として，プールだけではなく，遊具やボールのやり取り遊びを通じての身体とことばが一体となった交信が行われた（表3－①③⑤，図2－②）。さらに，児自らの遊びにOTを巻き込んだ後は，OTをプールに残したまま，自らがコロコロに行き，何度も玉を転がして楽しんだ（表3－⑥，図2－③）。OTがコロコロをして見せても（表3－④），プールで見ているだけだったが，自らが感覚調整を行った後（表3－⑤）には，コロコロを楽しむことができた（表3－⑥）。

第2セッションでも児なりの遊具やOTと関わる前のセンソリーニーズの調整が行われている（表3－③⑤⑧⑨）。続いて児の挑戦が続き，スイングにて座位姿勢を保持し，バランスを楽しめるようになった。そのためOTが，立位での遊びに巻き込むと直ぐに（表3－⑦，図2－④），ロープをしっかりと握り，姿勢を保持しようとするが保持しきれず，床に足をつけてしまった。その後，「いち，に，さん」と言って，自らプールに飛び込んだ（表3－⑧，図2－⑤）。この行為は，OTの働きかけに応じきれずに，失敗した自分を落ち着かせるためにセンソリーニーズを満たしたのではないかと考える。その後，再びはさみやコマを見せて，机上活動に巻き込んだ（表3－⑨）。しかし，児は逆に，自分の方に関心を向けさせようとして，プールに飛び込んだ（表3－⑨）。このようにセンソリーニーズを満たした後には，OTと一緒にボールのやり取りを「はーい，いくよ」ということばを真似ながら，楽しむことができるようになると考える（表3－⑩，図2－A）。

また，さらにOTからの姿勢調整や運動企画を必要とするような働きかけに応じることもできた（表3－⑪，図2－④）。その後OTは，再度はさみ活動に巻き込んだ（表3－⑫）。児は，ことばで「ダメ」と拒否するが，OTの手を握りにくることから（OTへの信頼と活動の拒否）OTがさらに巻き込むことで自ら，はさみを使って楽しむことができるのではないかと推測し，はさみ活動に再び巻き込むが「ダメ」との拒否から（表3－⑬），OTの先走った巻き込みを子どもに見抜かれたのではないかと考える。

次に，児はローラーなどで反復的な遊びをOTと楽しんだ（表3－⑭）。十分に活動と身体を介したコミュニケーションをとることができた。また，第1セッションで抱っこによる巻き込みを拒否しなかったことから，信頼関係は築かれていると判断した。そのためOTは，児を抱っこして机まで誘った。児のはさみ活動には関心はあるが，上手くできるかな，という両価性の思いを「やってみよう」という方向に向けることができた（表3－⑮，図2－⑥，B）のではないかと考える。それ以降，モデリングにより，何度か連続的にはさみ活動をすることができた。

Ayresは，発達障害児が身体を介して新しい環境や関わりを苦手とするために，こだわりとも思える遊びのパターンを持ち環境との関係性を安定させると述べている[26]。また，身体を介した環境との関わりは，ことばの発達に重要であると加藤は述べている[18]。

これらのことから，第2セッションでも，OTは，児のセンソリーニーズを満たす活動や児の遊びの順序性を見守ったことが，OTの意図する遊びに誘う（巻き込み）ことができたのではないかと考える。

4．第2セッションでの作業療法の成果

図2のように第1セッションで育んだ情動的

Presented by Medical*Online

コミュニケーションをとおして，お互いの意図に相手を誘い込む（巻き込む）ことが積極的に行われた。そして，OTの意図をもとに，活動と身体を介したコミュニケーションが増え，児自らが運動企画の必要な遊びに挑戦するようになった。同時に遊びの広がりがみられるようになった。この相互の意図する方向への誘い（巻き込み）のなかで，活動と身体を介したコミュニケーションが反復されることで，お互いの行為から，意図を読み取りやすくなり，ことばによる交信へと発展させることができた（図2-A）。そして，さらに，はさみ活動のモデリングを通して，何度も紙をはさみで切るという行為へと発展した。道具とことばを介したコミュニケーションへと発展させることができた（図2-B）。

第2セッションでは，開始当初から活動と身体を介したコミュニケーションが多かったため，児の行為から意図が明確にわかるようになった。

第1，第2セッションとも，OTの意図した遊びの誘い（巻き込み）に応じた後は，自らが強いセンソリーニーズを満たす活動を行っていることから，触感覚や前庭感覚に偏りのある児が，対人関係を保つためのベースとして，それらの感覚への強いニーズを満たすことが必要であることが示唆された。

Ⅵ. まとめ

情動的コミュニケーションを基盤にした作業療法の場面を，現象学的分析に基づいて意識の志向性を考察し，作業療法の成果を探索した。児のセンソリーニーズを充足させる遊びへの成り込み（共有）と見守りにより共感関係を成立させた。それにより児が姿勢調整，運動企画，目と手の協調遊びを自ら行うことが増えた。それらの活動と身体を介して表示される行為から児の志向性が明確な意図として判断できるようになった。また，それらの関係をベースとして，道具とことばを介したコミュニケーションへ発展した。

なお，第1，第2セッションの作業療法の成果を導いた関係のとり方と遊びを発展させる方法を個別療育のための方法として提案した。

謝辞

本事例研究にご協力をいただきました，患児，家族の皆さま，発達支援センターの職員の皆さまに深謝致します。

文献

1) 高橋三郎，大野　裕，染矢俊幸（訳）．DSM-Ⅳ-TR精神疾患の分類と診断の手引き．改訂版．東京：医学書院，2003：50-62.
2) 小林隆児．不適応行動を起こす子どもとの関係づくりのコツ．東海大学健康科学紀要　2000；6：57-64.
3) 南部真理子．虐待を受けた子どもの関係発達論．甲南女子大学大学院論集，人間科学研究編　2007；5：53-65.
4) 岩永竜一郎，土田玲子，川崎千里，他．軽度発達障害児に対する感覚統合療法の訓練形態による効果の差について―JMAPスコアによる個別指導と集団指導の効果の比較―．作業療法　1998；17：455-461.
5) 岩永竜一郎，大迫真貴子，長谷龍太郎，他．前庭及び体性感覚刺激が自閉症のアイコンタクトに及ぼす影響．作業療法　2002；21：23-28.
6) 岩永竜一郎，伊藤斉子，清水信之，他．小集団作業療法が高機能広汎性発達障害の心の理論に及ぼす効果―パイロットスタディー．作業療法　2005；24：474-483.
7) Anita C，Bundy J，Shelly J，et al（土田玲子，小西紀一監訳）．感覚統合とその実践．東京：協同医書出版社，2006：11-12.
8) 小林隆児．自閉症とことばの成り立ち．京都：ミネルヴァ書房，2004：26-28.
9) 辛島千恵子，発達障害をもつ子どもと成人，家族のためのADL―作業療法士のための技術の絵本―．東京：三輪書店，2008：11-20.
10) Chieko K．Developing a method of measuring positive emotion in people with profound mental retardation through the interpretation of 'facial expression of happiness'．金沢大学医学部保健学科つるま保健会誌　2005；29（1）：21-34.
11) Matsumoto D，Ekman P．American-Japanese cultural differences in intensity ratings of facial expressions of emotion．Motivation and Emotion 1989；13：143-156.

Presented by Medical*Online

12) 辛島千恵子，生田宗博．最重度知的障害をもつ対象者への作業療法の効果を「幸福の表情」で測定する．作業療法　2005；24：349-359.
13) 辛島千恵子，生田宗博．重度知的障害をもつ対象者の「幸福の表情」の符号化とその臨床的意味について．作業療法　2004；23：457-461.
14) 村田久行．対人関係における他者の理解，現象学的アプローチ．東海大学健康科学部紀要 2000；6：109-114.
15) 小沢一仁．現象学的アプローチを用いた青年の自己理解のための対話的研究の模索．帝京学園短期大学紀要　1996；18：11-21.
16) 荒木孝治．研究的実践を導く現象学的方法について．教育科学セミナリー　2006；37：53-60.
17) 太田篤志，土田玲子，宮島奈美恵．感覚発達チェックリスト改訂版（JSI-R）標準化に関する研究．感覚統合研究　2002；9：45-63.
18) 加藤寿宏．幼児期・学童期高機能広汎性発達障害児に対する作業療法支援．OTジャーナル 2006；40：1063-1068.
19) 鯨岡　峻．原初的コミュニケーションの諸相．京都：ミネルヴァ書房，2003：103-119.
20) A．バンデュラ．モデリングの心理学，観察学習の理論と方法．東京：金子書房，1975：103-108.
21) 園田順一，高山　巌．子どもの臨床行動療法．東京：川島書店，1978：32-34.
22) 辛島千恵子，加藤哲也，安本大樹．行動分析に基づいた摂食指導．OTジャーナル　1995；29：437-442.
23) 広瀬寛子．現象学的アプローチを用いた研究プロセスと今後の課題．看護教育研究　1993；8：31-36.
24) Beck C．Phenomenology，its use in nursing research．International Journal of Nursing studies 1994；31（6）：449-510.
25) 広瀬寛子．看護研究における現象学的アプローチの適用に関する考察，看護面接過程の現象学的分析方法作成までのプロセスに焦点を当てて．日本看護科学学会誌　1992；12：45-57.
26) Ayres AJ．Developmental dyspraxia；is it a unitary function?．Occup Ther J Res 1987；7：93-110.

〔Summary〕

The purpose of this case study is to search for the effects of occupational therapy based upon affective communication between a child with autism (hereafter, the child) and an occupational therapist (hereafter, OT) from the child's intentionality as anticipated by the OT. The method is that the OT made meanings of the child's intentionality by paying attention to the relationship between the child and the OT based upon the phenomenological analysis of the facts from two videotaped occupational therapy sessions. As a result, the relationship developed from the communication through the activities and body to the communication through the activities using tools, as the child grew interest in the OT while creating an empathetic relationship based upon affective communication. This process enabled the child to have simple communication using words more often and enabled the OT to create the relationship with the child in which the OT can sense the child's intentionality as a clear intention.

〔Key words〕
autistic, occupational therapy, affective communication, phenomenological analysis, qualitative research

Presented by Medical*Online